〔国宝「松浦屏風」と桃山・江戸の美術展によせて〕

伝 岩佐又兵衛筆「源氏物語図屏風」をめぐって

江戸時代初期に制作された風俗画には、岩佐又兵衛作と伝えられる作品が数多くあります。又兵衛の人物画の特色に上げられるのは、「豊頬長頤」つまり、豊かな頬と長い頤を持つ顔の表現です。多くの伝承作品がありますが、制作年代がわかる基準作は川越東照宮に所蔵された「三十六歌仙図扁額」の一件しかありません。この「中務」と「人麿」の裏面には、朱漆で「寛永拾七年庚辰年（1640）絵師　土佐光信末流岩佐又兵衛尉勝以図」と記され、又兵衛が六十三才の晩年にいたった作風がわかります。土佐光信は室町時代の後期に宮廷絵所預を務めた土佐派の絵師です。その「末流」とは、土佐派の作と考えられていた大和絵の名品から学んだということでしょう。「土佐光信末流」という記載には、物語絵、合戦絵、職人絵、歌仙絵など、大和絵の古画に見られる様々な人物表現が、江戸時代初期に盛んに描かれた風俗画の母胎となったことが示されています。

又兵衛作と伝えられる作品には、王朝風俗を描く作品も少なくありません。『源氏物語』を描く屏風作品にも、毛利家伝来作品（国華四百五十号掲載）、「東洋古美術展観図録」（山中商会主催、昭和十四年三月）作品番号176、「展観入札売立会」（東京美術商協同組合主催、昭和四十二年四月）作品番号118などがあり、大和文華館の所蔵する「源氏物語図屏風」もその一つです。縦の寸法が三尺ほどの中屏風の一隻ですが、当初は対の一双であった可能性もあります。建物と金雲によって画面を上下二段に区画し、上段に向かって右から「若紫」、「蓬生」、「澪標」、下段に「明石」、「絵合」、「若菜上」の順に配し、金雲には周囲に連珠文を内側ほど小さく三重に回らし、沙綾形の地に酢漿草、菊、三巴の丸文を散らした文様を厚く盛り上げています。伝統的な吹抜屋台のように室内の様子を見せながら、遠近感を考慮して整えた建物の表現によって、時と場所を隔てた六場面がまるで一つの大きな邸をめぐる出来事のように構成されています。各場面では物語に応じて人物の老若や主従の別などを描き分け、感情の動きまで捉えており、この絵師が風俗画を描く力量を備えていたことがわかります。初期風俗画の「湯女図」（MOA美術館蔵）に描かれた一人の遊女の横顔は、「澪標」の牛車の陰から現れる従者と非常によく似ています。また、この「明石」の場面の光源氏と鎌倉時代の作と推定されている「上畳本三十六歌絵」の「貫之」の顔を比較しますと、光源氏の顔の輪郭は高貴な性質を強調した瓜実顔の柔らかい中性的な表現になっていますが、目鼻などの描写には共通点が多く、大和絵の古画を学習していることがわかります。しかし、代表的な又兵衛作品の「豊頬長頤」とは若干異なる印象を受けます。光源氏の表情は晩年の又兵衛様式を示す川越東照宮の「三十六歌仙図」よりも、むしろ上畳本に近く感じられます。通常、絵師の様式は長い画業の間に展開します。この作品の場合、典型的な又兵衛様式が確立する前の作か、後の作かと考えますと、前の作と思われます。そうすると、又兵衛の初期作品か又兵衛の出現を準備した絵師の作かという問題になるのですが、又兵衛の初期作品の基準作がなく、判断は容易ではありません。

上畳本
紀貫之像・部分

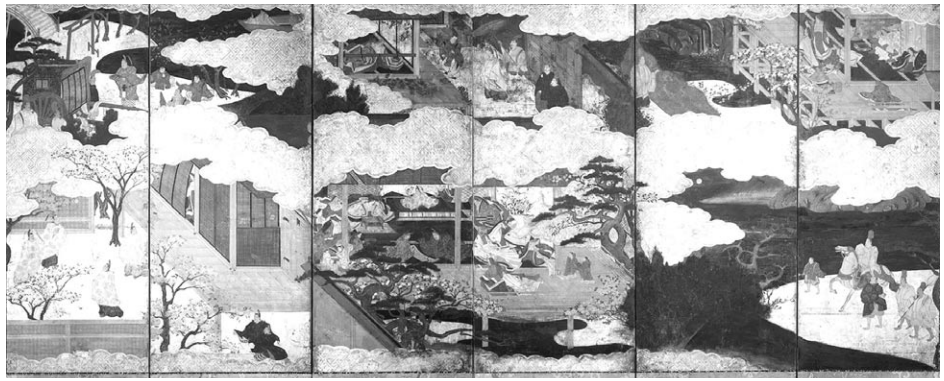
源氏物語図屏風・部分

源氏物語図屏風・部分

湯女図・部分

豊臣秀吉の七回忌、慶長九年八月に催された豊国大明神臨時祭礼を描く「豊国神社祭礼図屏風」（徳川美術館蔵）も、又兵衛作品として著名ですが、制作時期はわかっていません。同画題の屏風を狩野内膳重郷が描いており、豊国社の社僧、神竜院梵舜の日記、『舜旧記』の慶長十一年八月十八日条に「去十三日大坂ヨリ片桐市正（且元）為奉納屏風一双、先年臨時祭絵屏風也、下陣立置、諸人見物也」、慶長十七年五月八日の条に「当社下陣之屏風新調一双、今日始而予持上了」という記載があります。前者が内膳作品、後者が又兵衛作品とすると、又兵衛作品は慶長十七年（1612）、三十五才の作品となります。検討の余地を残しますが、又兵衛の様式展開を考える上で興味深い記録です。　（中部義隆）

（「上畳本三十六歌仙絵」の挿図は『日本絵巻物全集　第15巻』昭和42年角川書店刊より、「湯女図」の挿図は佐藤康宏著『絵は語る11　湯女図』平成５年平凡社刊より複写させていただきました。）


源氏物語図屏風

季刊 美のたより №142
平成15年４月４日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.